



## 会員のページ



### ★民俗藻類学の旅再訪編 —十六島、島持ち・島子に話を聞く—

民俗藻類学者、濱田 仁先生に同行して出雲市十六島を訪れ、島持ち（ノリを産する岩場の持主）と島子（ノリ採り女）の方から心尽くしの歓待を受けた。

まず島持ちの渡部勇氏の案内で「出雲国風土記」にも載る、こずのやしろ のりしまのやしろ許豆社と紫菜島社（55巻2号の「民俗藻類学の旅」参照）を山上に訪ねた。途中その由来や祭祀の話を伺い、後で文献や記事などを見せていただいた。又境内に碑のある山根千五右衛門は、昔集落が海賊に襲われた際先頭に立って戦った庄屋で、その時の傷が元で亡くなったそうだ。十六島は古来、最上品質のノリの産地として名高い。豊かな集落と見られて外から何度も襲撃されたことだろう。

その後公民館に招かれて新鮮な魚貝料理をいただき、耳も味噌も全開させて、島子である渡部夫人や小澤房子さん達から貴重な体験談を伺うことができた。

写真は今から数十年前の島子のファッションである。手甲脚半に足元は道中わらじ。このわらじは身幅が狭く、足指もはみ出すほど小ぶりにできており、踵に押さえの立ち上げがあるため踏ん張れる形をしている。濡れて滑る岩上で大波が寄せれば逃げ、引けば戻ってノリ摘みに励む、辛く危険な寒中作業だ。島子は爪を切つてはいけなさとされた。長く伸ばした爪で岩肌からノリを掻き取るためだ。その爪はシーズンの終わりにはすっかり磨り減ってしまい、血の滲むほどだったと言う。よく育つと30cmほどになるノリを絞っては籠に入れ、重いので7、8割になれば持ち帰ったとのこと。ノリを絞るときの感触を女性の豊かな黒髪に重ね合わせ、小澤家では正月飾りに添える



島子の服装（昭和40年頃、左が小澤さん）

時、ノリをそつと結ぶそうさだ。摘んだノリは勝手に持ち帰れないが、貝は自由に採れる。郷土食の「海苔筆」は、ベベ貝（ベッコウガサ）に生ノリと野菜その他を一緒に煮たいわぼごった煮だが、箸ですくったノリが墨を含ませた筆に似ることからこの名がついた。この貝はノリを食べて育つため、格別のだしが出て一層風味が増すのだと渡部氏は語る。

機会があれば海苔筆の季節にまた訪れたいものと思っている。

（木村光子）

### ★海藻押し葉ラミネート作りコーナー（養殖研究所）

養殖研究所の一般公開は、北京オリンピックも大詰めの日8月23日に開催され、朝からの雨にも関わらず約700名の方にご来場頂きました。数ある企画の中でも、海藻ラミネート作りは、毎年、一、二を争う人気コーナーです。台紙に海藻押し葉や魚のイラストを貼り付け、ラミネート加工して作品を完成させます。素材には、養殖研究所の前に広がる五ヶ所湾で採集したアカモク、マクサ、アナアオサなど十数種類の海藻押し葉を準備しました。



〔作品例〕

台紙と素材を選んで貼り付けるシンプルな作業ですが、子供から大人まで作品に向かう目は真剣そのもの。お孫さんの隣で製作に没頭するおじいちゃん、おばあちゃんの姿もあちこちで見られました。どんな色や形の海藻を使うか、配置はどうするか、なかなかどうして美的センスが要求されます。海中写真の台紙に海藻押し葉を藻場に見立てて配置し海中風景を再現するもよし、ピンクやグリーンの無地の台紙に海藻押し葉を並べてアート作品にするもよし。海藻の造形美が加わって作品に深みが増し、世界にひとつだけの素敵な作品が出来上がります。

お土産のラミネート作品のように、楽しい夏の思い出がいつまでも来場者の心に残ることを願っています。



（石樋由香）

### ★海藻標本の寄贈を受付中（科博、TNS）

国立科学博物館大型藻類標本室（TNS、つくば市）では、海藻標本の寄贈を歓迎しております（詳細は55巻2号）。（北山）

### ★誌上アンケート「イワズタ・イワツタ問題」

前号のアンケートにご協力いただきまして、ありがとうございます。前号の編集後記で予告しましたように、回答いただいた方の中から厳正な抽選（立会人：新山優子編集実行委員、鈴木雅大氏）を行い、選ばれた下記の3名様に粗品（「かはくトランプ」、56巻2号 p. 152を参照）をお送りしました：

大谷修司様、佐藤真由美様、八木康博様。  
おめでとうございます。



（編）